

研究ノート

言語と文書の間

ーメタ科学としての図書館情報学と専門用語研究ー

影浦 峯[†]

[†] 東京大学大学院教育学研究科

本稿では、二つの課題を扱う。第一に、文書を、言語学や語学が扱う言語・言語表現との対比で特徴づけることである。図書館情報学では、文書をめぐる理論的・実践的考察がなされてきたが、これまで文書における言語表現の位置付けはあまり検討の対象とされてこなかった。第二に、専門用語集の文書としての位置付けと専門用語研究における専門用語集の位置付けを明確にすることである。専門用語集は図書館情報学の観点からはレファレンス・ツールとみなされるが、そのような視点は専門用語研究において場を占めていない。本稿では、これら二点の整理を通して、図書館情報学が言語表現を扱うことの位置付けと、それを踏まえた専門用語研究の方向性を示す。

キーワード：文書、言語表現、専門用語集、メタ科学

目次

1 はじめに

2 文書と言語表現

- 2.1 文書とテキスト：図書館情報学の議論
- 2.2 文書における／としての言語表現
- 2.3 文書要素としての専門用語

3 文書としての専門用語集

- 3.1 専門用語研究の現状
- 3.2 専門用語と専門語彙
- 3.3 文書としての専門用語集
- 3.4 専門用語集と専門語彙

4 整理

- 4.1 図書館情報学と言語表現
- 4.2 専門用語研究と専門用語集

5 終わりに：メタ科学の要請

1 はじめに

本稿では、関連する二つの課題を扱う。

第一は、文書¹を、言語学や語学が扱う言語・言語表現との対比のもとで特徴づけることである。図書館情報学では、文書に関する考察がなされてきたが、言語学や語学が扱う言語と文書における言語表現との関係から文書について論じてきた研究は見られない。電子的な情報流通が拡大し、より小さな単位を扱えるようになっている中で、図書や論文を構成する、より小さな単位の扱いを明確化することは、図書館情報学にとって重要な課題となっている²。

第一の課題を扱う際に、文書の要素として専門用語を取り上げる。そこから、第二の課題、すなわち専門用語集の文書としての位置付けを明確にし、文書としての専門用語集を専門用語研究の中で位置付ける課題に論を展開する。専門用語研究において図書館情報学の視点はあまり理解さ

れておらず、専門用語を文書において、あるいは文書として捉える視点はほとんどない。

本稿では、これら二点の整理を通して、図書館情報学が言語表現を扱うとはどういうことかを明らかにするとともに、それを踏まえ、専門用語研究が専門用語研究として専門用語を扱うとはどういうことかを明らかにする。

本稿では、専門用語研究との関係を一つのテーマとしているため、文書としては専門分野の文献を想定して話を進める。本稿は、著者がこれまで幾つかの場所で発表してきたことを特に文書としての専門用語集という視点から改めて整理したものである³。文書としての専門用語集の位置付けは、本稿ではじめて論ずるものである。

2 文書と言語表現

2.1 文書とテキスト：図書館情報学の議論

文書とは何かという問いは図書館情報学で繰り返し提起され回答が与えられてきたが、文書の中核をなす構成要素である言語表現・テキスト⁴の位置付けと性質をめぐり、言語学・語学における言語との関係を扱ったものはほとんどない。

例えば N. W. Lund によるレビュー⁵が挙げている 116 の文献中でこの問題を正面から扱ったものは見られない⁶。また、1997 年に What is a “Document” という表題の論文⁷を発表し、文書をめぐる議論を触発した M. K. Buckland による比較的最近の総説的論文⁸では、“ある対象は何らかの信念の主張あるいは認識がそこに存在する場合に文書と見做される”⁹という重要な指摘があるものの、この点が言語学における言語との関係で展開されることはない。参考文献に挙げられている 61 文献の中にも、言語表現の位置付けを文書の視点から捉えることが言語学や語学において言語表現を扱うこととどのように異なるかあるいは重なるかを論ずるものは見当たらない。

図書館情報学の領域で、文書との関係でテキストが取り上げられる場合、図表やオブジェ、自然物のようなテキスト以外のものとの対比や関係が論ぜられるか、あるいはテキスト以外のものの

文書としての位置付けを検討するための参照点として言及されることが主なのである¹⁰。

これは、実践としてのドキュメンテーションが伝統的に文書を最小の単位としてきたことに対応する。テキストからなる文書というものはほぼ自明のものと見做されているのである。S. Briet がドキュメンテーションの対象はテキストではなく事実性を示す任意の証拠たる文書であると語ったときにも¹¹、テキストからなる文書がどのようなものであるかは前提とされていた。

2.2 文書における／としての言語表現

M. K. Buckland による文書の特徴付けを踏まえるならば、文書における言語表現は“何らかの信念の主張あるいは認識”を表明するもの、また、それを構成する要素であることになる。これは、言語学や語学が扱う言語表現と本質的に異なる。言語学や語学においては、与えられた言語表現は、基本的に、可算無限個ありうる適格な言語表現を生成する有限の規則や制約を見つけ出すためのデータである¹²。これに対して、文書における言語表現は、現実世界（あるいは言語表現に対応して想定される仮想的な世界）での真偽が問われる対象として扱われる。

M. Dummett は、高等学校の語学では、“That thing is in the way.”という文を訳す際に、“That thing”が実際に何を指すかを特定する必要はないが、文書においてこの文を理解するためにはそれが何を指すか特定することが必須であると述べている¹³。言語学におけるこの文の扱いも語学と同様である。一方、真偽は、真理条件的意味論で扱われているが、それは言語哲学に近く、またそこでは形式化された意味の世界を導入し真偽の条件を検討する。これに対し、言語表現を文書の要素として見る場合、この世界における真偽が問われる対象となる。

このことはまた、立ち戻って文書の位置付けを明確にする。すなわち、文書は、歴史的に固有のものとして現実中存在しているという点である¹⁴。当然、文書の集合が形成するアーカイヴと言語学における言語の標本としてのコーパスも、本質的

に異なる¹⁵。さらに、従来物理的なまとまりが担っていた文書の単位が自明でなくなったことを踏まえると、文書における言語表現は、それ自体、文書としての言語表現と見なされうることになる。アーカイヴも、従来の図書等ではなく言語表現を単位とすることがありうることになるが、アーカイヴが見かけ上、言語学が言う文等と同じ言語表現を単位としているとしても、その位置付けは異なることになる。

図書館情報学そして図書館実践の場では、これまで、個々のケースにおいて言語表現からなるまとまりが文書としての要件を満たすかどうかをめぐる判定を出版流通等の外部的なメカニズムに委ねていた。しかしながら、電子的情報流通の拡大により、流通のあり方の変化から文書としての要件を満たすかどうかの判定を外部に依存したままでは限界があることから、この判定を行う必要性が高まっており、また、文書のまとまりが不明確になっていること、伝統的な文書の単位よりも小さな単位が操作可能になると同時にそれを扱う必要性が高まっていることから、その判定において、そこでの認識がどのようなものであるかを評価することが必要になっている¹⁶。

2.3 文書要素としての専門用語

専門用語は、概念を表すもので、言語学的にはほとんどの場合に語や句の形式をとる¹⁷。専門用語は、“何らかの信念の主張あるいは認識”に用いられる基本的な構成要素である。

ここで、単語や句が表す言語学や語学で言うところの意味と専門用語が表すとされる概念との差異がどのようなものであるかが問題となる。3.1で見るように、この区別は研究の領域では曖昧であるが、現実の場では明確である。

言語学者は、例えば“ジェノサイド犯罪”（集団殺害犯罪）の概念や定義は、言語学が扱う意味論の範囲の問題ではなく、国際法研究者が扱うものであると正しく見做すであろう。

実際には、“ジェノサイド犯罪”の定義と概念を扱うのは国際法研究者だけではない。一般の市民がこの言葉を使うときには、基本的に国際法にお

ける概念を扱う。例えば、2023年10月からイスラエルがガザでやっていることがジェノサイド犯罪に該当することを確認するためには、関連する国際刑事法の書籍や文献を参照するか¹⁸、あるいは、ジェノサイド条約や国際刑事裁判所ローマ規程を参照するであろう¹⁹。

この簡単な事例が示している重要な点は、専門用語が言語学や語学が捉える言語の要素ではなく文書の要素であることに対応して、専門用語が表す概念は歴史の中で具体的に生産された知識を表す固有の文書において規定され、概念を同定する行為はそのような文書を参照することによってなされるということである²⁰。

現実の世界で言語表現に関与する場合、基本的には、言語学や語学が扱うようなレベルでではなく、概念や命題を表すものとして人はそれらに関与する。専門用語は言語の要素ではなく文書の要素なのである。

3 文書としての専門用語集

3.1 専門用語研究の現状

専門用語が概念を表すという点は、専門用語研究で基本的な了解事項となっている²¹。しかしながら、専門用語研究における概念の記述と、言語学における意味の記述とは、基本的に同型であり、記述のレベルで両者を区別することは困難であることが指摘されている²²。

1990年代以降の専門用語研究は、コーパスを活用した研究の発展、いわゆる“テキスト論的転回”を一つの特徴とする²³。コーパスは言語学や自然言語処理における概念であり、文書を対象とした集合を表すアーカイヴとは位置付けが異なる。実際、テキスト論的転回の中で、専門用語の研究と実践は分野専門家の手から言語学者の手にわたったことが指摘されている²⁴。また、専門用語が表す概念の記述に、言語学の領域で発達してきた意味記述の枠組みが積極的に導入されている²⁵。

この転回は、いわば専門用語を対象とした言語学の研究の導入であり、専門用語研究としての専門用語研究ではない。こうした新たな展開が専門

用語研究の発達を促したことは確かであるし、専門用語が基本的に語や句という言語学が扱う単位に該当する形式を有することから正当化される。しかしながら、これらの研究では、以下の点が研究の結果において欠落する。

- その研究が専門用語の研究であること。
- 概念を扱うこと。

両者は論理的に関連している。記述が概念を扱うものであればそれによって対象が専門用語であることは確保されるし、そうでなければ記述が専門用語の記述であることを保証するために対象が事前に専門用語であることが同定されている必要がある。研究が専門用語の研究であることを確保するためには、対応して、記述を言語学における意味論的な記述ではなく概念の記述として立てること、専門用語という対象を同定する機構を研究そのものに内在するかたちで確立すること、という二つの方向性がある。

ところで、2.3 で述べたように、概念の参照は固有の文書群の参照を前提とするため、いわゆる辞書的な記述を展開しても概念の記述に到達しえないことは明らかである。これは、専門分野の中項目から大項目の事典を言語学者が作ることは無いという当たり前のことに対応する。この点を認めつつ、専門用語研究としての専門用語研究を立てるために何が求められるかについては第5節で簡単に検討する。

もう一つの方向性、すなわち、専門用語を同定することを研究の内部に取り込む方向性は、興味深いことに、ほぼ唯一、応用研究としての単言語用語抽出で扱われている²⁶。そこでは、コーパスに基づく言語処理を基本的な枠組みとし、分野依存のコーパスから専門用語候補を抽出するための手法の開発が進められている²⁷。実験環境での改善は着実に見られているものの、専門用語の同定が必要となる実用の場においては、主に用語のパターンと頻度に基づく基本的な手法が用いられており、高度な手法は採用されていない²⁸。

3.2 専門用語と専門語彙

ここでは、前節の最後に見た問題を起点に専門用語と専門語彙の関係を整理する。応用の場で高度な用語抽出手法が使われていない理由はいくつか指摘されている。

主な応用の一つとして、翻訳対象となる文書に現れる用語を同定する作業がある。ここでは、基本的に包括的に用語を同定することが求められると同時に、何が抽出でき何が抽出できないかについて利用者が一定程度理解できる振舞いをシステムがすることが重要となる²⁹。高度な手法ではこれが保証されないことが多い。

主な応用のもう一つとして、専門用語集の拡張がある。ここでも高度な手法はそれほど使われていない。これに関しては、そもそも、多くの自動抽出手法が低頻度のものを扱えず、一方で用語集の拡張で求められる新たな専門用語は一般にコーパスでの出現頻度が低いため、応用で求められる要求を手法が満たしにくいという問題が指摘されている³⁰。

これらの問題は、技術的な観点に関わるものであるが、その背後に理論的な問題が存在することは、特に後者の応用においては明らかである。一般に、ある専門分野の研究者が自分の分野の研究を進めるにあたり、用いる表現や概念を専門用語として改めて対象化することはなく、専門用語を当たり前のものとしてそう意識せずに用いている。それらを改めて専門用語という対象として認めるにあたっては、専門分野の語彙というまとまりが先行して想定されることが理論的な前提となる³¹。専門用語を構成する単位はまず文書に現れるが、それが専門用語であると同定するためには専門語彙という概念が要請される。専門用語は、それが専門用語として認識される限りにおいて、専門語彙の要素として認識されるのである³²。

ここまでの議論から、自動専門用語抽出が直面している問題として二つの点を認めることができる。第一は、それが専門用語の同定という課題をめぐるものであるにもかかわらず、言語学的な応用と同様の言語処理の枠組みで行われていることである。第二は、専門用語の同定において概念的に先取りして存在しなくてはならない専門

語彙を考慮していないことである。専門用語研究を専門用語研究として行うための二つの鍵のうち、専門用語を専門用語として同定する課題を扱うためには、専門語彙を扱う必要がある。

3.3 文書としての専門用語集

専門語彙は、その分野の語彙と定義される³³。この定義は単なる言い換えであるし、また、これにより想定される専門語彙はいささか抽象的であるので、専門語彙について検討するために、ここではまず専門語彙を具体化したものとしての専門用語集の位置付けを考えよう。

比較的使用者の多い言語で、学習言語が確立し、その言語を使って専門分野の研究活動が行われている場合、そしてその分野がそれなりに確立し一定の規模を有している場合には、専門用語集（専門用語事典等）が編集されることが多い。これらは、レファレンス・ツールとして、通常、図書に相当する形式を有する。また、論文のように直接真偽が問題になるような言明から構成されている文書とは異なるが、“何らかの信念の主張あるいは認識がそこに存在する”と言うことはできるので、形式的にだけでなく実質的にも、専門用語集は文書であると言える。

専門用語の同定にあたっては理論的に専門語彙が先行し、専門語彙を具体化したものとして専門用語集があるのであれば、具体的な専門用語集を研究対象とするあるいは研究の出発点とすることを、専門用語研究としての専門用語研究を立てるための一つの方向としての専門用語を専門用語として同定する作業において考慮することは必然であろう。実際、自動専門用語抽出の研究においてしばしばお題目のように言われる、専門分野の発達が早いために専門用語集のアップデートが人手では間に合わないといった主張は、具体的な専門用語集を想定してこそ意味を持つ。その場合、抽出されるに足る専門用語は、対象となる専門用語集に新たに加えられるべき候補として判断されるのであるから、具体的な対象として想定される専門用語集に依存することになる³⁴。

従って、自動専門用語抽出を現実に用いられるようなものにするためには、コーパスと個々の専門用語の関係（だけ）ではなく、具体的な専門用語集と専門用語候補との関係を考慮する必要がある。専門語彙、さらにはそれを文書として具現化した具体的な専門用語集が、研究の基本的な対象となるのである。

言語処理や言語学で広く共有されているモデルや説明の一般化への要請、あるいは範囲を広げて自然科学の一般的なイメージに照らして考えると、現実に存在する個々の具体的な専門用語集を研究の対象とすることは科学的でないと見做されがちである。

そこでこの点をめぐっていくつかありうる批判を整理しておこう³⁵。第一に、具体的な専門用語集は編集プロセスを経た人工的なものであり、研究対象としては不適切であるという批判である。これに対しては、一般に受け入れられているテキスト・コーパスを構成するテキストも文書として記録流通する際に査読や編集といった人工的な選別プロセスを経た極めて人工的なものであることを指摘しておけば十分である。それにもかかわらずテキスト・コーパスは一般化可能なデータを構成すると考えるのは、それに基づいた特定方向での一般化が研究を構成するという信念に基づいているに過ぎない。その信念が不適切であるわけではないが、それを対象の属性として投影することは不適切である。

第二に、第一の点と関連するが、具体的な専門用語集は時代的あるいはその他の現実的制約から、分野を代表していないという批判がありうる。これも第一の批判と同様に、単に先取りして分野というものを抽象的に想像しそれに対して代表性を有する標本を抽出できるという枠組みをその主張者が採用していることの表明に過ぎない。実証的なレベルで観察するならば、ある専門分野がそれと認められるのは、学会や学部学科、専門誌、専門用語事典といった具体的な社会制度の確立による。世界のどの大学の物理学科も物理学の代表性を有する標本ではないが、それらなしに物理学の領域の同一性は存在しない。その点で、分

野の成立の条件を構成する個々の具体的な専門用語集を、その存在を条件の一つとして認識可能になった抽象的な分野という概念に対して代表性を有しないのではないかという観点から批判することは遠近法的な過誤である。

第三に、具体的な専門用語集を対象とする限り、可能なのは記述に過ぎず、一般的な知見を得ることはできないのではないかという批判がありうる。これに対しては、記述は理論化・モデル化の前提であること、また、一般的な知見として想定されるものが依然として言語学や語学が想定する方向での一般化に過ぎないことを指摘しておく。図書館情報学はそもそもその本質において博物学的な列挙の学であるし、一般化は許容可能な形式ではなく現実的存在可能性に向かう³⁶。いわゆる自然科学は、それらを区別しなくてよいことを特徴とするとすることができる³⁷。

ここで同時に、具体的な専門用語集を研究対象とすることの正当化が、一部の人文学で使われている、著作や個人の位置付けに基づく正当化とは異なることも指摘しておかなくてはならない。専門用語集は、基本的に単に現実に存在しているというだけで、研究対象あるいは研究の出発点となる。現実的制約の中で専門用語集を取り上げる際に社会的にどの程度流通しているかといった点を評価し考慮に入れることは当然ありうるが、文学や哲学における著作や個人とは異なり、専門用語集はその分野における研究対象として扱われ評価されるものではない。

3.4 専門用語集と専門語彙

本節の前項までで、専門用語研究を専門用語研究そのものとして立てるための一つの方向として、専門用語をそうと認識する研究を考えるならば、専門語彙を対象とする必要があること、それに対応した現実の存在として文書としての専門用語集があることを確認した。ここで、文書として具体的に存在する専門用語集と、理論的に想定される専門語彙との関係を改めて整理しよう。

まず、専門語彙という概念がないと専門用語集は成り立たない。その意味で、概念としての専門語彙は、論理的に、専門用語集に先行する。その一方で、我々は、具体的な専門用語集なしに、抽象的な概念としてではなく外延的・具体的な存在として研究の対象とすることができる専門語彙を扱うことはできない。個人の頭の中にあるものは分野に帰属する専門語彙ではなく分野に帰属する専門用語集であるとその個人が考えているものであり、それを共有可能なかたちで列挙するならば、それは、たとえその時点では全く使われなくても、現実存在する文書としての専門用語集となる。従って、文書としての専門用語集以外に、研究対象として扱うことができる専門語彙は存在しない。

実は、命題とその集合からなる一般的な意味での専門分野（の知識）についても同じことが言える。その分野の知識と言われるものは、その分野の研究者の頭の中にあるのではなく（それはその分野の研究者がその分野の知識と認識しているものであってその分野の知識ではない）、表現され記録され流通するかたち、すなわち文書のかたちで対象化される。ある分野の知識がその分野の研究者の頭の中にあるとするならば、その知識にアクセスするためにはその分野の研究者になる必要があるが、その際にその分野の研究者はその分野が対象とする事象の研究をするのであって、その分野が対象とする事象についての知識を研究するわけではない。そこには、対象を研究する行為はあり、そこで生み出された知識を対象の研究の一環として検討することはあっても、その知識を研究対象とする行為はない。

専門語彙の概念は専門用語の概念に先行し、また、専門語彙を専門用語研究の対象として扱うためには文書としての専門用語集が求められる。少なからぬ専門用語研究はこの手続きを介して取り上げる専門用語を決定するのではなく、実際に扱う専門用語を研究者が社会的な位置付けに応じて恣意的に決定している。その意味で、そうした研究は、対象の選択に関して文学や哲学の研究に近い。これに対して、いくつかの研究では、論

文として報告される研究に付随して実際に専門用語集が作られることがある³⁸。これは極めて重要なことであるにもかかわらず、それら用語集そのものについては研究の対象とはなっていない。

このような状況であることには、いくつかの理由がある。まず、専門用語研究において言語学の流れを援用することが多いことである。これはむしろ専門用語研究としての専門用語研究を立てるためにここでは扱わなかった方向性、すなわち概念の記述を意味の記述とわかる方向性の中で、単独的な文書への参照なしにその記述を立てようとする試みへの積極的な諦めから来ているものと考えることができる。もう一つ、専門用語を専門用語として同定する鍵となる専門語彙については、言語学や言語処理の一般的な枠組みのもとで人工的すぎると誤って見做されがちであることである。それに加えて、技術的には、専門用語集を対象に有意義なかたちで研究を進める手法を研究者が手にしていないという問題がある。

4 整理

4.1 図書館情報学と言語表現

本稿の出発点の一つは、電子的な情報流通の発展により、図書館情報学において、図書やそれに相当するまとまりとしての文書を前提として、その中には踏み込まずに文書を扱うだけでは不十分になっているという認識であった。第2節で論じた通り、文書において言語表現を認識する場合、言語学や語学とは異なり、現実に対する言明の位置付けが問われる。

実際のところ、人が日常的に接している言語表現は、文書としての言語表現である³⁹。例えば、読む行為の対象は、技術文書であり、小説であり、ノンフィクションであり、法律であって、言語学や語学学習の必要性から読むのでなければ、対象が単語や文や段落であることはない。書くことも翻訳も同様である。どのようなものを翻訳しているか問われた翻訳者が“私が翻訳しているのは単語です”、“文です”などと答えるならば、ふざけて

いると見做されるであろう。言語表現の扱いにおいて例外的なのは言語学や語学なのである。

文書としての言語表現を扱う実践として翻訳や読書、執筆等がある。これらのうち、翻訳や読書についてはそれを扱う研究領域があるが、それらは文書を扱うのではなく文書に対する行為としての翻訳や読書を扱う。執筆についても同様であって、文書における言語表現の内容を捨象しないならば、とりわけ専門分野では、その分野が扱う対象の研究が明らかにする認識を言語的に表出する実践を対象化することはできない⁴⁰。しかしながらそのようにした際には、文書の特徴づける内容は失われる。この逆説的状况のためか、文書としての言語表現そのものを対象として扱う研究はまとまったかたちでは存在していない。

図書館情報学は文書を扱う。伝統的な文書の単位を前提とできなくなった現状で、文書としての言語表現を図書館情報学が扱うのは、図書館情報学という学問領域の自己規定のもとでは自然な延長でありまた論理的な必然でもある。

4.2 専門用語研究と専門用語集

第3節で論じたように、専門用語研究としての専門用語研究を立てるために専門用語の同定を研究の内部に取り込むためには、専門語彙に対応する、文書としての具体的な専門用語集を扱うことが論理的に要請される。もう一つの方向性である概念の記述を意味の記述とは別のものとして立てる方向性は、2.3で述べたように、何らかのかたちでの文書への参照を必要条件とする。従って、専門用語研究としての専門用語研究においては、いずれにせよ、文書を扱うことが求められることになる。

これは、概念を表すという専門用語の規定から必然的に導かれる帰結である。言語学者は、“ジェノサイド犯罪”の言語学的な意味を扱うとしても、概念については国際法の研究者に委ねるのであるから、言語学や語学が扱うようなかたちでは、専門用語を専門用語として扱うことは論理的にできようもない。そのため、そうした研究がな

それでも専門用語の研究であることは、実際に扱う対象が専門用語であるとして認められているものであることに支えられることになる。その観点から専門用語研究としての専門用語研究を立てようとするならば、与えられた要素が専門用語であることの判定を研究の内部に組み込むことが求められる。概念を扱うことに対して、これは外延的に専門用語の範囲を確定する課題となる。

それを扱うと称する自動専門用語抽出の検討から、そのためには専門語彙の概念が要請されること、そして専門語彙は具体的な専門用語集としてのみ外延的な対象として扱えることを確認した。そのような専門用語集は、やはり文書であるから、専門用語研究としての専門用語研究は、図書館情報学の自己規定の範囲に入ることになる。

5 終わりに：メタ科学の要請

文書は“何らかの信念の主張あるいは認識”を表明するものと規定され、文書を構成する言語表現もそのようなものとして扱われる。言語学が言うところの意味ではなく概念を表すという専門用語の定義は、専門用語が文書の構成要素であって言語の構成要素ではないことに対応している。

文書は、“何らかの信念の主張あるいは認識”を表明するものとして、歴史的に固有の存在である。統語論だけでなく意味論においても語用論においても、それぞれのレベルで形式的な適格性を問題にする言語学とはその点で全く異なる。

翻訳や読書などの文書をめぐる操作や行為ではなく文書や専門用語のようなその構成要素そのものを扱おうとする場合には、従って、必然的に、そこで表明されている“何らかの信念の主張あるいは認識”を何らかのかたちで扱うことが求められる。専門分野の文書に関しては、そこで専門的な知識が関わってくる。文書の扱いをめぐって、例えば専門性の高い文書の翻訳を、プロの翻訳者が行うべきか、その分野の専門家が行うべきかといった問い、専門用語集の編集はその分野の

専門家が行うべきか専門用語の実務家が行うべきかといった問いは、文書の操作が形式的な操作の対象ではなく、“何らかの信念の主張あるいは認識”を伴うものであり、その操作もそれを離れては行えないという理解を反映している。

ここで、文書で扱われる認識の内容を重視しそれを外部から扱うことを放棄して、その部分は基本的にその分野の専門家が扱う領域であるとするならば、文書というものの自体は対象化されないままになる。一方、内容に踏み込まないならば、そもそも文書を扱うことにはならない。

図書館情報学では伝統的に文書が文書であることの保証を外部に委ね、文書における言語表現の位置付けをめぐる問いを扱ってこなかった。専門用語研究では概念を扱うと言いながら意味を扱うこととの差異化を十分にすることができないまま、特に近年、意味のレベルで専門用語を扱う研究が発達した。いずれも、それ自体としては重要であるが、文書を扱うと自己規定する図書館情報学、そして専門用語としての専門用語を扱う専門用語研究としては、十分ではない。“何らかの信念の主張あるいは認識”を表明するものである文書を、“何らかの信念の主張あるいは認識”を表明する行為そのものに参画するのではないかたちで扱うことが必要である。これは、専門分野の文書に関して言うと、メタ科学として図書館情報学と専門用語研究を行うことを意味する。それは情報リテラシーのような標語ではなく、論理実証主義のかたちを変えた再構成の試みとなろう⁴¹。

謝辞

本研究の一部は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）「専門語彙成長モデルの構築と多言語専門用語辞書拡張への応用」（24H00736）の助成を受けて行われた。内容・形式について丁寧なコメントをくださった3名の査読者に感謝いたします。

注

¹ 複数領域にまたがる議論を展開する必要上、ここでは“文書”という言葉を経英語の document に対応するものとして緩やかに用いる。関連する用語とその定義には本稿では踏み込まない。

² 影浦峽 “言語と記号” 〈日本図書館情報学会編『図書館情報学事典』丸善出版, 2023〉 p. 4–5.

³ 特に関連するものを以下に挙げる。

Kageura, Kyo. “Toward the Theoretical Study of Terms: A Sketch from the Linguistic Viewpoint,” *Terminology*, vol. 2, no. 2, 1995, p. 239–257.

影浦峽 “人間の翻訳と機械の翻訳(1): 翻訳者は何を翻訳しているか?” *AAMT Journal*, no. 71, 2019, p. 14–19.

Kageura, Kyo. “The Status of Documents and Related Concepts in Translation and in Library Science,” *ALIEP 2019 Proceedings*, 2019, p. 1–13.

影浦峽 “人間の翻訳と機械の翻訳(2): 文書とはどのようなものか?” *AAMT Journal*, no. 72, 2020, p. 7–11.

Kageura, Kyo. “The Status of Terms and Concepts in the Learned Use of Language: Invoking the Wüsterian Spirit in the Era of Machine Learning,” in Drewer, P., Mayer, F. and Pulitano, D. eds. *Terminologie: Industrie, Information, Intelligenz*, Mannheim, Deutscher Terminologie-Tag, 2021, p. 3–12.

影浦, *op. cit.*, 2023.

Kageura, Kyo. “The Position of Research in Terminology and the Status of Terminologies: A Theoretical Examination,” *Asialex 2024 Proceedings*, 2024, p. 195–205.

Kageura, Kyo. “Automatic Term Processing in the Context of Translation: Theoretical and Practical Issues and Prospects.” In Wang, Q. and Qisong, Y. eds. *Frontiers in Terminology*. Harbin, Heilongjiang University Press, 2024, p. 337–368.

⁴ “言語表現”と“テキスト”は指し示す範囲が異なるが本稿の議論においては区別の必要はない。引用・参照した文献で“テキスト”や“text”が使われている場合には“テキスト”を用いる。

⁵ Lund, Niels W. “Document Theory,” *Annual Review of Information Science and Technology*, vol. 43, no. 1, 2009, p. 1–55.

⁶ Foucault, Michel. *L'Archéologie du Savoir*. Paris, Gallimard, 1969, 257p. の英語版が引用されているが、踏み込んだ議論が展開されているわけではない。関連する話題については Kageura, *op. cit.*, 2019. を参照。

⁷ Buckland, Michael K. “What is a ‘Document’,” *Journal of the American Society for Information Science*, vol. 48, no. 9, 1997, p. 804–809.

⁸ Buckland, Michael K. “Document Theory,” *Knowledge Organization*, vol. 45, no. 5, 2018, p. 425–436.

⁹ *Ibid.*, p. 428.

¹⁰ 例えば以下である。

Briet, Suzanne. *Qu'est-ce Que la Documentation?* Paris, Edit, 1951, 44p.

Lund, Neils W. “Document, Text and Medium: Concepts, Theories and Disciplines,” *Journal of Documentation*, vol. 66, no. 5, 2010, p. 734–749.

Marsh, Emily E. and Domas White, M., “A Taxonomy of Relationships between Images and Text”, *Journal of Documentation*, vol. 59, no. 6, 2003, p. 647–672.

¹¹ Briet, *op. cit.*, p. 7.

¹² Foucault, *op. cit.*, p. 39.

Lyons, John. *Language and Linguistics: An Introduction*. Cambridge, Cambridge University Press, 1981, 370p.

¹³ Dummett, Michael. *Origins of Analytical Philosophy*. London, Duckworth, 1993, 212p, p. 55.

¹⁴ ここでは機能的に文書を捉える視点は機能的に文書を捉えることを可能にする対象が常に存在することを前提とするという意味で論理的に副次的であることを踏まえ、文書を実体として捉えている。

¹⁵ 影浦峽 “翻訳を通して「言葉」を見ると?” 『自然言語処理』 vol. 19, no. 2, 2012, p. 63–64.

¹⁶ 情報リテラシーは名目としてはこれに関わるが、問題になっているのは情報リテラシーを提唱することではなく具体的な内容と実践である。

¹⁷ de Bessé, Bruno, Nkwenti-Azeh, Blaise and Sager, Juan C. “Glossary of Terms Used in Terminology,” *Terminology*, vol. 4, no. 1, 1997, p. 152–153.

- ¹⁸ 例えば、クープ・ステファニー『国際法からとらえるパレスチナ Q&A イスラエルの犯罪をとめるために〈岩波ブックレット〉』東京、岩波書店、2024. 72p.
- ¹⁹ *Convention on the Prevention and Punishment of the Crime of Genocide*, 1948.
- Rome Statute of the International Criminal Court*, 1998.
- ²⁰ ここではこの点を取りわけ明確に示す法律の専門用語と概念の例を挙げたが基本的に他の分野の専門用語でも同じである。
- ²¹ de Bessé, et al. *op. cit.*, p. 152–153.
- Felber, Helmut. *Terminology Manual*. Paris, UNESCO & Infoterm, 1984, 426p.
- Picht, Heribert and Draskau, Jennifer. 1985. *Terminology: An Introduction*. Guildford, University of Surrey, 1985, 265p.
- ²² Kageura, *op. cit.*, 1995.
- ²³ Humbley, John. “The Reception of Wüster’s General Theory of Terminology,” in Faber, P. and L’Homme, M-C. eds. *Theoretical Perspectives on Terminology*. Amsterdam, John Benjamins, 2022, p. 15–35.
- この流れの整理については以下も参照。
- Kageura, *op. cit.*, 2024.
- ²⁴ *Ibid.*, p. 27.
- ²⁵ L’Homme, Marie-Claude. *Lexical Semantics for Terminology: An Introduction*. Amsterdam, John Benjamins, 2020, 263p.
- ²⁶ それ以外の研究では対象としての専門用語が専門用語であることは基本的に自明視されていると言ってよい。
- ²⁷ Kageura, Kyo and Umino, Bin. “Methods of Automatic Term Recognition: A Review,” *Terminology*, vol. 3, no. 2, 1996, p. 259–289.
- Heylen, Kris and Hertog, Dirk de. “Automatic Term Extraction,” in Kockaert, H. J. and Steurs, F. eds. *Handbook of Terminology*. Vol. 1. Amsterdam, John Benjamins, 2015, p. 203–221.
- ²⁸ Kageura, *op. cit.*, 2024.
- ²⁹ Kageura, Kyo and Marshman, Elizabeth. “Terminology Extraction and Terminology Management,” in O’Hagan, M. ed. *Routledge Handbook of Translation and Technology*, London, Routledge, 2019, p. 61–77.
- ³⁰ *Ibid.*, p. 64–65.
- ³¹ Kageura, Kyo. *The Quantitative Analysis of the Dynamics and Structure of Terminologies*. Amsterdam, John Benjamins, 2012, 243p.
- ³² Kageura, Kyo. “Terminology and Lexicography,” in Kockaert, H. J. and Steurs, F. eds. *Handbook of Terminology*, vol. 1, 2015, p. 45–59.
- ³³ de Bessé, et al. *op. cit.*, p. 153.
- ³⁴ 影浦峯 “言語実務における専門用語の扱いと NLP における専門用語処理” 『言語処理学会 第 28 回年次大会 発表論文集』 2022, p. 1907–1911.
- ³⁵ Kageura, *op. cit.*, 2024, p. 200–201.に基づく。
- ³⁶ Kageura, Kyo. *The Dynamics of Terminology: A Descriptive Theory of Term Formation and Terminological Growth*. Amsterdam, John Benjamins, 2002, 263p.
- ここから、図書館情報学においては、例えばある二つの対象の差異を研究する際に、どのような差異が存在するかが重要であることが導かれる。差異が存在するかどうかの確認などは第一義的には問いとして適切ではないし、それを示すために不用意に統計的検定を行うことは、統計学における検定の位置付けをめぐる問題を傍に置いたとしても、多くの場合に意味がないものとなる。
- ³⁷ 例えば、この世界の編成に対応していない法則は、単に定義上、物理学の法則ではない。
- ³⁸ DiCoEnviro : La Dictionnaire Fondamental de l’Environnement, <https://olst.ling.umontreal.ca/dicoenviro/moteur/search-enviro.cgi> (アクセス日: 2025-01-12)
- DiCoInfo : La Dictionnaire Fondamental de l’Informatique et de l’Internet, <https://olst.ling.umontreal.ca/dicoinfo/moteur/search.cgi> (アクセス日: 2025-01-12)
- EcoLexicon: Terminological Knowledge Base, <http://ecolexicon.ugr.es/en/index.htm> (アクセス日: 2025-01-12)
- ³⁹ 日常の会話における言語表現を文書とするのは一般的な文書の定義からはずれるが、位置付けとしては言語学や語学が対象とするかたちでの言語表現ではなく文書における言語表現に対応するものである。
- ⁴⁰ 文学研究は対象が言語表現であるに過ぎず、文書における言語表現ではなく文学としての言語表現を扱う。
- ⁴¹ 図書館情報学については、
- Kageura, Kyo. “Library and Information Science as Metascience,” *A-LIEP 2021 Proceedings*, 2021, p. 297–307.
- また、独立したものとしての専門用語研究を唱えた Eugen Wüster は、論理実証主義の流れを意識していた。Humbley, *op. cit.*を参照。

Language and document: Library and information science and terminology as a metascience

Kyo KAGEURA[†]

[†]Graduate School of Education, the University of Tokyo

This paper addresses two issues. The first issue is characterizing documents in comparison with language expressions studied in linguistics. In library and information science, much work has been devoted to the theoretical and practical clarification of the nature of documents. However, the nature of language expressions in documents has not been examined. The second issue is clarifying the role of terminologies as documents and their position in terminology research. From the perspective of library and information science, terminologies are considered a type of reference tool, but this perspective has not been adopted in terminology research. By addressing these two issues, this paper highlights the position of library and information science in relation to language expressions and outlines the requirements for terminology research from the point of view of library and information science.

Keywords: Document, Language Expressions, Terminologies, Metascience